

長崎高商留学生(38期中退)劉 源張氏青春譜

鴨川 弘

戦後69年の去年4月3日、「中国の品質管理の父」と呼ばれた経済学者の劉 源張氏が北京の自宅で、脳卒中で倒れ亡くなられた。89歳だった。日本で劉氏のことを知っている人は、一部の専門家を除いて、かなり少ないと思う。劉氏は、1942年(昭和17年)長崎高商に中華民国より留学。昭和20年終戦の年の3月心ならずも、国策により、高松高商(その後高松経専)へ転校させられたので、高松経専の卒業となっている。このことは、同期の留学生の一部しか知らない。劉氏は学業の大半を長崎高商に在籍・終戦の間際に在籍しただけで高松経専卒とは、腑に落ちないと思うのは私だけだろうか。

氏はその後、京都大学を卒業。アメリカ留学を経て14年ぶりに故国へ帰り、当時の中国の国家の変容に翻弄されながら研究を続けられ、中国の発展に貢献、名誉ある地位を築かれた。

かく言う私は、長大経済学部のある片淵町の住人で、71歳。戦前、満州、中国の留学生も下宿させていたという家に住み継ぎ、大学のキャンパスを眺めて暮らしている。氏の逝去の報に接したのは、最近のことで、現在、経済



学部3年の留学生、常 聖琳君(山東省出身)とインターネットで、日本の中国研究家 荒井 利明氏(元滋賀県立大学教授)のコメントを見て、劉氏が戦時下、長崎に留学していた事を知った。私は、長大経済学部同窓会誌『瓊林第112号』に、高商フアンの一入として小説『流転海峡』を、当時の事務局長(故)二ノ瀬 剛氏のご好意により寄稿させて頂いたことがある(P93、P97)。先の大戦に翻弄される留学生の青春に寄り添うように史実を織り込みつつ、想像力を働かせて書かせてもらった。

丁寧に教えてくれた。ついに私達は、無二の親友になった。彼の教えで私は次第に日本語が上手くなってきて、会話が弾んだ。

当時、日本では、食糧は配給制度となり、一日に三合二勺の米では、飢えないまでも、力仕事には絶対足りない量だった。そこで、私達はよく下宿を替わった。替わった最初、待遇がよく、だんだん悪くなってきた。そこで、私達は又下宿を替わった。一度、私達が下宿を替わったばかりの時に、お女将さんが側に座って、緒方氏には多く、私には少なく御飯をついだ。それでいいのだが、実は、緒方氏が熊本の実家に帰って、長崎に戻るたび、私に餅の土産があつた。これで、私の胃袋は満たされた。下宿の男主人は、兵隊に行かれ、戦地に赴いていたので、お女将さん一人で下宿を切り盛りした。何人か下宿人がいたので、彼女は気が紛れていたようだった。

緒方氏の実家は、熊本県の富農で、彼は、私を熊本遊覧の旅に誘ってくれた。昔、熊本は、有力な大名の下にあつて、堅固な石垣に囲まれた熊本城内を、案内してくれた。確かに見応えのある古い史跡だった。彼は又私を連れて、西郷隆盛が自決したところ(城山か?)に行った。彼は西郷の一生を、声を詰まらせ感極まって話してくれた。私は、熊本人が持つ、郷土の偉人に対する思いに感動を受けた。彼は私を実家に案内して、日本の農家の構造と特長を説明してくれた。その時から、私はさらに熊本に親近感を覚えた。70年後、私の妻の日本人母が永住帰国し、熊本に住んだ為、なお一層、私の思いが深まった。

1943年6月、私は、長崎の憲兵に捕まり、拘留所に入れられた。私は、中国共産党のスパイの嫌疑をかけられた。それは私は山登りが好きで緒方氏と一緒に長崎の山に登り、山から、三菱造船所に停泊中の、軍艦をみたので、軍艦を偵察していたのでは、と思われたようである。

1944年(昭和19年)1月、私は、(冤罪と判り)釈放された。下宿に帰ると、私はテーブルの上に緒方氏が置いた一通の手紙を見つけた。手紙には、彼が召集を受け入隊し、前線に赴く旨の内容と、私に対し、健康と幸せを祈る、と書き残してあった。彼の部隊の番号も添えられていた。

第2次世界大戦後、日本の新聞は、連日、日本軍人の復員のニュースを報じていた。ある日、私は、新聞に載ったひとつの記事に目を奪われた。緒方氏の部隊番号の船が、太平洋上で、ある島へ向かう途中、米軍潜水艦の攻撃を受け、部隊諸共撃沈され、海底に沈んだと言う記事だった。

2004年(平成16年)11月22日、私は来日中、緒方氏のことを尋ねて、

さて、劉氏の長崎での生活はどのようなものであったか。氏の死後出版された『中国工程院院士伝記 劉 源張自伝』(著者劉源張 人民出版社 科学出版社発行)の第1章「私の親友」と題し、交友、親戚縁者等の記述があり、その101ページに「私と緒方隆夫」の標題で、長崎高商在学中のことが記述されていた。

本稿は、自伝に描かれた青年劉氏の長崎滞在の記述をご本人の自伝に沿って語ってもらうことにした。

「私と緒方隆夫氏」 (翻訳) 私(鴨川)と常 聖琳氏

緒方氏と私とは面白い縁から友達になった。1942年2月、長崎に来て、民間に住居を定め下宿した。下宿には私の他に3人の日本の学生がいた。緒方氏はその一人です。彼らは、全部2階に住み、私一人は1階に住んでいた。ある日、夕食後、私は自室で安田さんに手紙を書きました。私は、青島(チンタオ)でゴム企業を経営している日本の商人、安田理雄さんから援助を受けていたので、彼(安田氏)の母校であった長崎高等商業学校に留学したので。だから、彼に手紙を書いて、無事長崎に着いたことを報告したかったです。私は、当時、日本語が、下手で、日本語で文章の意味を十分伝えられなかった。そこで図書館から手紙の書き方の本を借りて手紙を書いた。私が書いている時、緒方氏が二階から私の部屋に下りてきて、私のテーブル上の手紙を見て、声を張り上げたが、私には聞き取れなかった。でも、彼は驚いた様子を見せた。彼は、ゆつくりと私に説明し、私が書いた文字は、一般の日本人でも書けない文体で、この文体は、昔の日本人が使った文章の書き方だったそうです。彼は、普通の日本語もよく話せない私が、このような難しい文章に挑戦していることに、ひどく感心した。こうしたことがきっかけで、緒方氏と良い友達になった。私の日本語の誤りを正し、敬語の使い方も教えてくれた。私が言いたいことを伝えられない時には、彼は、

長崎大学経済学部の同窓会に立ち寄り、卒業生名簿を調べて、緒方氏が逝去者の欄にあるのを確認した。弱冠、21歳の若さであった。

私は、緒方氏が中国の戦地に行かなかったことに、多少の安堵を覚えた。

以上が自伝の概略です。そこで、緒方隆夫氏が、熊本の何処の出身か、死因が劉氏の言うとおりののか、探した結果、出身は学籍簿で判明。ご存命であれば、今年10月で卒寿の緒方氏、そして卒寿を目前に亡くなられた劉 源張氏の、戦時下の、国境を越えた厚い友情に思いをはせ、御霊のご冥福を祈って筆を置きたい。(NPO法人アジア交流友の会員)

風信

○長崎の六月と言えば六月一日の「長崎くんち小屋入り」に始まる。この日は、早朝より奉納踊当番町の人々は、今年の「奉納踊稽古始めの日」と定められているので、踊奉納の無事を祈って「氏神諏訪神社」に町内役員を先頭に踊手囃方一同、シャギリの音に合わせて正装し参拝に出かける。そのシャギリの音を聞くとき長崎の街の人達は何かソワソワして仕事を手につかないと言う。

○或る人より「シャギリとは一体なんですか」とたずねられた。日本語辞典に「シャギリとは歌舞伎の一幕の終りに太鼓笛等ではやす鳴物」とあった。「長崎のシャギリ」も江戸時代・上方方面より伝えられたもので、長崎県無形文化財に指定されている。

○先日、岐阜県多治見市より軍艦武蔵関係の御遺族・児島氏来訪あり。「叔父が長崎の旧家で大変御世話になった記録が自宅にあり、其の旧家を探してほしい」との事。早速その旧家を訪ねたところ武蔵関係の御便り八十途通が保存されていた。その中に故児島少佐殿自筆の手紙四通あり、よるこんで複写して帰られた。

○今年是被爆七十年。長崎市でも長崎県九条の会を中心に「平和憲法の集い」が各方面で開催されている。私達有志も毎週日曜午前中長崎市光源寺で開催されている御法話の後、三〇分ばかり、「私は原爆をみましたのよ」という「老人会話」を始めた。老御婦人の曰く、「飛行機が唐八景の方から飛んで来ましてね、浦上の方に行つて…」等。

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F



